

## 高垣松雄と大正末期 日本のアメリカ文学

後 藤 昭 次

— 1 —

高垣松雄氏は大正8年の春に立教大学の英文科を出るとすぐ、附属中学校の英語教師となるが、その夏ハワイのザ・フレンド・ピース奨学生の特許試験にパスしてホノルルのプナホ学院 (Punahou Academy) に入学している。当時この学校は、多くの卒業生をアメリカの有名大学に送り出してきたハワイ唯一の名門進学校であったと思われるが、氏はここで一年学んだのち、翌大正9年の秋にはシカゴ大学に進学した。留学期間を何年にするか、二年目はどこの大学に留学するかなど、渡米前にどの程度の計画がなされていたかは詳にしないが、プナホ学院に於る氏の猛烈な勉強ぶりはエピソードによっても伝えられている<sup>(1)</sup>。

日本を出発する時点で、あるいはハワイ滞在中に、氏がアメリカ文学にどれだけ関心を抱き、どこからどの程度の知識を得ていたかは今日では推測の域を出ないが、氏の書き遺したものからはっきりと云えることは、渡米前に V. W. Brooks, John Addington Symonds: A Biographical Study (1914) を読んで恐らくはその関心の延長として留学一年目のハワイ滞在中に同じ著者の America's Coming-of-Age (1915) を読み、さらに Waldo Frank, Our America (1919) を読むに及んで現代アメリカ文学への関心を強めたこと<sup>(2)</sup>。次いで留学二年目のシカゴ滞在中 (大正9年秋~10年秋) の一年間には、ジェイムズ・オープンハイムの詩劇『夜』を翻訳して日本に送って発表 (『新文芸』大正10年6月号) し、Brooks が創始者の一人となった雑誌 The Freeman を熱心に読み、「人生の為の文学を高唱する」<sup>(3)</sup> Brooks の文学観にいよいよ関心を深めて文通し<sup>(4)</sup>、大学図書館の書庫の中でたまたまアンダソンの著書 Marching Men (1917) を手に取って見て、その献辞に「アメリカの労働者に」とあったことから興味をおぼえ、やがてアンダソン作品の熱心な読者になったこと<sup>(5)</sup> などである。

以上の断片的な事実から推測すると、アメリカ現代文学の紹介者・研究者としての氏の準備は、主としてハワイ留学以降になされたものと考えるのが妥当

であるようだ。氏が立教大学に学んだのは大正4年4月から8年3月までの4年間であり、在学中にアメリカ文学の講義のようなものはなかったと思われる。もちろん、明治時代から透谷の『エマルソン』（明治27年）があり、大正に入ると秋骨訳の『エマソン全集』（大正6年）ほか有島武郎のホイットマン訳詩と論評のほか白鳥省吾や富田碎花の訳も出ている。フランクリン、ポー、ホーソン、ソーロウ、ロングフェロウなどはすでに広く日本でも知られ、教えられてもいたが、同時代のアメリカ文学のまともな紹介など皆無に等しかつたに違いない。<sup>(6)</sup> わずかな例外（例えば堺利彦のジャック・ロンドン紹介）は別とすれば、「現代アメリカ文学に対する興味が俄に盛んになった」のは昭和4、5年のことであったと、氏自身ものちに回想している。<sup>(7)</sup> この時期が日本に於るプロレタリア文学の興隆と一致しているのは興味深い事実として指摘できることである。

氏の在学当時、立教大学でどのような授業がなされていたか、履修要項が立教大学図書館にもこのっていないので確かな事は分らないが、幸いにも残されている大正10～11年度（氏の卒業2年後）の英文の履修要項 St. Paul's College Catalogue 1921-1922 を参考までに見ると、英語英文学関係の教師はアメリカ人を含めて13名ほどで、その中には戦後もかなり長い間立教の教壇に立ち続けた根岸由太郎氏や武藤康雄氏の名前のほか、英文科長を長い間つとめ、日本の英文学教育の歴史にその名をとどめる岡倉由三郎氏の名も見える。しかし残念なことにこの要項ではテキストや授業の内容はわからない。だが、それから数年後の、これまた幸いにも一冊だけ残されている昭和3～4年の履修要項 St. Paul's University Bulletin Catalogue 1928-29 によると、多くの英文学のテキストのほか、岡倉氏は Selections from Henry James を使用し、教授 Robert E. Bundy 氏は Emerson's Essays I, II をテキストとして使用し、参考書には全集や日記のほか Woodberry, Cabot, Harrison などの伝記的著作をあげているが、興味深いことに、この Bundy 氏は英文科で「アメリカ史」の講義も開いていて、テキストには Muggey, American History を使用し、参考書としては Channing, History of the United States; Wilson, History of the United States; Rhodes, History of the United States を挙げている。高垣氏は大正11年に立教大学予科教授となるが、その年の暮には病気のため休職し、大正14年10月から英文科教授となるものの、適に二、三時間の出講だったためか、この要項に氏の名前は載っていない。

しかし氏の場合は、すでに同時代アメリカ文学に関する論文を多数発表していたのでその講義内容も想像できるが、昭和3～4年に立教大学で「アメリカ史」の講義があったというのは珍しい事のように思われる。恐らく日本の大学で行なわれた「アメリカ史」と名うたれた講義としては最も早いものの一つではないであろうか。

さて、話を元へ戻して、高垣松雄氏が立教大学在学中に授業でアメリカの現代文学に関する講義を聞いたとは考えられないし、当時の日本で現代アメリカ文学の片鱗になりとも接する機会はまだことに稀であったにちがいない。しかし、その稀な機会の一つにたまたまめぐり合ったことを、氏自身がのちに書き遺している。それは大正7年の夏、エイミ・ローウェルについての岡田哲蔵の講演を聞いて感動したことである。高垣氏は立教大学に入学する5年ほど前に早稲田大学の予科に入学し、この時は神経衰弱のため三ヶ月ほどで退学しているが、当時の早稲田からは秀れたユニテリアンの思想家や運動家が輩出し、また教授陣の中にもその共鳴者や運動家たちがいた。以来、高垣氏は友人達の話や読書を通じてユニテリアンの思想に興味を示し、ユニテリアン教会で催される講演会などには友人たちと一緒によく通っていたという。

指を折って教えてみると大正7年の夏であった。芝園橋際の、今では労働総同盟本部になっているが、当時ユニテリアン教会のあった建物で、思想芸芸に関する講演会が催された。その講演の一つは「現代の英詩」というので、英米の新しい詩の運動と代表的な詩人の紹介が試みられた。その中で、アメリカ新詩人を論じた優れた書物として紹介されたのがエイミ・ローウェル女史の『近代アメリカ詩の傾向』であった。講演後、私は講師——岡田哲蔵先生——から此のローウェル女史の書物を拝借して読んだが、それによつてはじめてアメリカの新しい詩に対する眼が開かれたのであった<sup>(9)</sup>

この「はじめてアメリカの新しい詩に対する眼が開かれた」講演を聞いた時から、後年のアメリカ文学研究者としての高垣松雄氏の準備は始められたと云えるようである。氏の26才、立教大学英文科生の最終学年のことであった。この講演を聞いた時から丁度一年後には日本を発ってハワイに留学し、二年後には日本の雑誌『新文芸』に詩劇「夜」の翻訳を載せている。いうまでもなく、これは氏の原稿で活字になった最初のものである。ローウェルおよび現代アメリカ詩に対する開眼からオープンハイム作品の翻訳に至るまでには、時間的には

短かいながらも、氏の内面は必ずしも平坦な道を歩いていないのではなかったと考えられる。つまり、ローウェルの『近代アメリカ詩の傾向』は、アメリカ現代詩の発展過程を明らかにしながら E. A. ロビンソン、R. フロスト、E. L. マスターズ、C. サンドバーグ、H. D., J. G. フレッチャーら六人の詩人を論じたもので、その中にまとまったオープンハイム論は含まれていないからである。なぜオープンハイムなのか。

そのことを考えるうえで、上に引いた氏の文章「ローウェル女史の詩風」は興味深い示唆を与えている。氏はこの文章で先ず、ローウェルの死の報に接して自分の感情を浪立てられることはなかったと云い、それはローウェルの詩人としての仕事が一とまず終わったという気持ちが自分にはあったからだと説明して、この詩人の功績を振り返っている。ローウェルの詩人としての活躍は A Dome of Many-Coloured Glass (1912) に始まり、これは不評ながらも第二および第三詩集の Sword Blades and Poppy Seed (1914) および Men, Women, and Ghosts (1916) にいたってイマジストあるいは自由律詩人としての地位を確立したのだった。その主張するところは「曰く、詩は美の創造である。曰く、詩人は指物師のように細心の工風を以て技巧に励まなければならない。曰く、詩人は思想の潑刺さを読者に感ぜしめるために絶えず新たな絵図を採求すべきである。また曰く、美は我々に道義の観念を訓えはしない」というものであり、これらが自由律のイマジズムの方法と、いわゆる交響的散文 (Polyphonic Prose) と共に、1916年頃を頂点とするアメリカの新詩運動の中心的話題となった。そして高垣氏は、具体的にローウェルの原文を引用しながらその詩風を説明し、イマジストとしての特徴などをあげてその後の作品についても触れたのち、次のように氏のローウェル観を述べている。

之等の詩集に収められた作品の多くは詩人の押えがたき熱情の迸しりと云うよりも、美の実験的創造とでも云うにふさわしい。詩人の直接経験に根ざした表現ではなく、歴史を通し、文献を通し、芸術的作品を通して得たる経験に対する詩人の精神的反動の表現とも呼ぶべきである。

つまり高垣氏は、詩的技巧や鮮烈なイメージによってアメリカ詩に革新をもたらした闘士といわれるローウェルの詩人としての役割を詩史の上で認めはするけれども、所詮ローウェルは教養あるボストン文化の継承者の家系の人であり、

世界各地を旅行し、家庭教師の教育で育てられた「温室の花」なのであって、それ以上のものをローウェルに期待するのは、どだい無理なのだという。上の引用のローウェル観は、裏返せばそのまま氏の文学観になる。つまり氏にとって文学は、抑え難い熱情のほとばしりでなければならず、小手先の技巧でもって実験するようなことば遊びや、歴史や文献を学んで得た知識によるのではなく、先ず何よりも生活者としての直接経験に根ざしたものでなければならない、というものであったに違いない。そのような意味で岡田哲蔵の講演と、その折に借りて読んだローウェルの『現代アメリカ詩の傾向』は、大学の最終学年にいた氏に現代アメリカ詩、ひいては現代アメリカ文学の新しい思潮に眼を開かせてくれ、ある意味では氏の関心に決定的とも云える方向づけをおこなったように思われるが、ローウェルの文学観そのものからはむしろ離れざるを得なかった。

— 2 —

氏がこのような文学観を内にはぐくんでいった背景には、学生時代からユニテリアン協会の運動に関心を寄せ、特に「六合雑誌」の主筆をしていた内ヶ崎作三郎<sup>(9)</sup>（早稲田でも教えた）の考えに共鳴していたこと、大正期日本のプロレタリア文学・思想が急速に興隆していたこと、の二つが大きな要素として働いていたことを考慮しなければならない。

内ヶ崎作三郎（明治10—昭和22年）はイギリス留学から帰国した（明治44年）のち統一キリスト教会（ユニテリアン協会の後身）の牧師を勤め『六合雑誌』の編集を辿じて大正期日本のキリスト教思想の発展と普及に大きな巧績をのこした。この雑誌そのものは文芸、政治思想、労働問題、教育思想、婦人運動から、生物学や天文学にいたるまで広く論説を掲載したキリスト教系の総合雑誌であったが、そのキリスト教は、創刊当初（明治13年）はともかく、明治末年以降はユニテリアン系の、いわば合理的キリスト教であった。それが明治末・大正初期の社会的進歩思想の胎頭と足並みを揃えるように社会的キリスト教となり、現実深くかわりながら哲学、思想、文芸、社会を論じることを通してキリスト教に於る進歩主義の道を歩んでゆく。高垣氏が、大正7年にはほとんど運命的とも云える出合いをした講演会も前述の通りユニテリアン教会で行なわれたものであり、講師の岡田哲蔵は当時、この雑誌の編集に加わって活躍していた有力メンバーの一人だったのである。ちなみに、大正7年というのは、大正期社会思想運動を一気に盛り上げる契機になる米騒動のおこった

年でもある。

主筆をしていた内ヶ崎の考え方だけが『六合雑誌』と日本のユニテリアニズムを社会的進歩主義へ導いたのではない。大正期日本は社会的状況に於ても精神的状況に於ても、どう仕様もない変革を迫られ、階級意識の進展に伴うさまざまな運動とともに変革の様態は大正5～6年頃から急激に顕現してきた。つまり大正4年4月に立教大学予科に入学し、大正8年3月に英文科を卒業した高垣氏は、この変革と過渡期の嵐の中で学生時代を送ったことになる。

明治の自然主義全盛の時代を受けた大正期は周知の通り耽美主義、理想主義、プロレタリアの乱立の時代である。前二者の流れに影響を与えたのはイギリスやフランスの世紀末作家たち、あるいはメーテルリンクであり、さらにベルグソンはじめ新理想主義を説いて世界的に共鳴者を生んだドイツの哲学者オイケン、あるいはタゴールなどの理想主義思想が移入されるに及んで大正期日本に前代未聞の哲学の時代が生れる。阿部次郎（『三太郎の日記』は大正7年刊）を中心とする岩波派思想家たちが岩波書店をバックに日本の精神文化をリードしたことは記憶にまだ鮮明なことである。その傍には、さらに理想主義的な青年芸術家たちがいて『白樺』（明治43～大正12年）に集まり、一方では「大正デモクラシー」というレッテルの貼られた時代であっただけに、日本の第一次世界大戦参戦後はデモクラシーの思想も普及して大正14年の普通選挙法の成立につながってゆく。しかし——と吉田精一はこの時代の状況を巧みに説明して云う——

しかし同時に大正6・7年ごろからの社会運動の上昇と階級意識の急ピッチな進展は、抽象的な理想主義の欠陥をつき、世界大戦終了後の反動的不況や社会不安と相俟って、社会主義の主張を急激に文壇・思想壇に漲らした。社会の「改造」、人間の「解放」は、その名の雑誌の創刊（共に大正8年）が示すように、時代の合ことばとなった。<sup>(10)</sup>

「改造」と「解放」の渦巻くような怒濤の前で大正前期の知識人たちがどのような対処の仕方をしたかは興味のある問題である。高垣氏は大正8年4月に立教大学を28才で卒業しているが、この時期の日本文学の状況を考えるときにまっ先に思い浮かぶのは芸術派の龍児・芥川龍之介であろう。芥川は大正3年に23才でデビューし、東大英文科を久米正雄らと一緒に卒業したのは大正5年7月である。以来、昭和2年7月に35才で世を去るまで一貫して作品の

完成をもって作家の使命と信じ続けた。晩年の作品「文芸的な、余りに文芸的な」の中で芥川は、この怒濤の意味を全く否定はしないが文芸作品の優美なるものに賭ける自分の立場を次のように書いている。

「エピキュールの園」を歩いたものは容易にその魅力を忘れることはできない。殊に僕等都会人はその点では誰よりも弱いのである。プロレタリア文芸の呼び声も勿論僕を動かさないのではない。が、それよりもこの問題は根本的に僕を動かすのである。……

僕の作品を作っているのは僕自身の人格を完成する為に作っているのではない。況や現世の社会組織を一新する為に作っているのではない。唯僕の中の詩人を完成する為に作っているのである。

過渡期の不安を内側から見事に書き現わした広津和郎「わが心を語る」<sup>(1)</sup>によれば、彼の同世代つまり「大正5・6年か8・9年頃までの間に文壇に出た年代の人々」は、自然主義のあとを受けて文壇に出て来た人々であり、「総てめいめい独自性と云ったものを磨けば事足りるような、一つの自由主義時代に育った人々だった。」さまざまな形で個人というもの、自由というものについてのヨーロッパの観念・思想が移入されたのは云う迄もない。人々は信じて「めいめいその独自性を探求する旅に出かけ」て行ったのである。広津自身も彼なりにその同じ道を歩き、ラッキョウの皮を剥くように自己を探って行って最後には何も残らないのではないかと不安になりつつも「自分の道を是認し」つづけ、ついにはその果てに「虚無の洞穴」を見たという。久米正雄も「云ってみれば尻尾を巻いて逃げる、と云った心持なのです。有らゆる意味で、私というものが、一つの行きづまりに来てゐるため」に一時日本を逃れる。続けて広津は自らの真理についての考え方が、昨日と今日ではまるで逆に思えるほどの心の動揺を告白し、こういうことは「渺くとも4・5年前には予想もつかないことであった。」「正直に言って、私の心は今その疲労と、洗っても洗っても洗ひ落ちて行かない過去の汚染とに悩んでいる」と書いている。したがって広津には芥川の自殺も「自由主義が次のものに転換しなければならない、その転換を前にしてのこのチャンピオンの自殺は、結局、過去の文化の重荷に動きのとれない、それ故に裨経のすりへって行く、或一団の作家達の苦悶の最も顕著の現れ」と見えたのである。つまり「過去の文化の地獄変である」と。過去の文化——それは云ってみれば大正初期の知識人の教養を支えていた自由主義や個人

主義、芥川の「或阿呆の一生」（遺稿）の20才の主人公が「人生は一行のポオドレエルにも若かない」と思いながら本を探す書棚に並ぶ「モオパスサン、ポオドレエル、ストリンドベリイ、イブセン、ショウ、トルストイ、……本というよりも寧ろ世紀末それ自身だった。ニイチェ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベール、……」に象徴されるものであった。

このような過渡的不安の中で学生時代を終えた高垣松雄氏が迷いながらもどうか歩き出した道は、いわゆる芥川の世紀末それ自体でなかったことはいうまでもない。前述のローヴェルについての批判のことばのうちにおのずと表現された道である。耽美派はとらず、社会的理想はあっても理想主義の哲学や白樺派にもつかず、キリスト教的社会主義には傾きながら没入できず、新劇隆盛の中でイブセンやショウにも容易に傾倒しなかった。そうはいうものの氏の方向が社会的、進歩的なものであったことは事実である。『改造』や『解放』を生み出していた社会的状況の中でそれは静かに準備され、留学中にすすめられた訳稿が大正10年6月号の『新文芸』に載ることになる。（ちなみに訳者名はペンネームの杉田未来となっている。）準備され蓄えられてきたものが、同時代アメリカ文学の社会的・進歩的なものを通してまさに爆発的に吹き出そうとしていたのである。

— 3 —

ミネソタに生れ、ニューヨーク市で育ち学んだJames Oppenheim (1882-1932)はMonday Morning (1909), Songs for the New Age (1914), War and Laughter (1916), The Book of Self (1917) The Solitary (1919) などでめざましい活躍ぶりを示した進歩的詩人であり、ほかに小説も書けば進歩的な文芸雑誌The Seven Arts (1916-1917) の主筆としても才筆をふるった新時代の代弁者であった。『夜』(Night) は上記最後の詩集に収められているがその前年に単行出版され、オニールを発見し育てたことで有名なプロヴィンスタウン劇団が同じ年に上演している。高垣氏がシカゴに移ったのは大正9年(1920)の秋であるから、上記の詩集はいずれも出版され、The Seven Arts 誌はすでに筆禍によって廃刊に追い込まれたあとであったが、「夜」の「はしがき」に「舞台の背景は一面に布を凹状に垂れて、これに紫色の光線をあてた。前景には小高い丘の頂を現して、夜の山嶺の感じを出した。登場人物は何れも動作少なく、シルエッ



トにすぎない。併し詩句の底光りのする美しさは実にすっきりした気持よさを湧き上らせるのである」と説明しているところから想像すると、ひょっとすると、どこかで氏はこの上演舞台を見ているかも知れない。しかしその事を証拠づける資料がないので残念ながら断言はできない。

「夜」の場面は星の輝く10月、とある丘の上。祭司、詩人、科学者の三人がそれぞれの立場から宇宙を、人生を語り合っている。祭司は「あなたは銀河をわたる天の牧者。あなたはわが主」と神をたたえる。科学者は「私達は自分を讃仰するばかりだ。太陽と諸遊星を形成し、これを駆り動かしてやまぬ其の力がやがて我等の微妙な脳の作用として現れ、思考判断の意識現象となるのだ」という。祭司はそれに対して、それは「人類の意識の本体を」知らないからだ」と反論する。詩人もまた、星をあおいでは遠い彼方の恋人を想うばかりで「父なる神などに就て知る必要はない」という。

そこへ一人の女が、死んだわが児を抱いて現われ「どなたか、皆様の中に此の世の生活の意味を教えて下さる方はございませんか」と三人に向って云う。それに答えて詩人は「あなた自身に意味があるのです。その人生の意味を求めてやまない所にこそ尊いものがあるのです」といいながら女の美しさに見とれる。祭司は女の抱いているのが死んだ子供だと聞かや「エホバ与え、エホバ取りたまふ。エホバの御名は讃むべきかな」と神をたたえる。女はわが児のたねをやどし、苦しみののちに生子、限りない愛をもって育ててきた児の今は亡き悲しみを訴える。ところが、それは神を忘れて肉のみを愛しているのと同じだと祭司はいさめる。あの児を取った者なら神でも呪ってやる、と女は祭司に向ってことばを投げる。「その怒りは尊いほどに恐ろしい。あなたの呪咀は全てものを潔める」と詩人はいう。しかし詩人もこの女の重荷を分け持つことはできない。

そういう女に対して科学者は「人間も草木と撰ぶ所はない」というこれこそ「人生のおごそかな事実」だという。女はますます亡きわが児への追慕に沈み、絶望し、自殺を思い立つ。そこへ女の夫が「俺をほったらかして何処へ行ってたんだ」と云いながら登場する。女は男としばし云い合っているうち、亡き児が二人のものであったこと、そうであればこそ男はいま妻である自分を以前にも増して必要としていることに気づく。女は云う「此の人は私の子供なのだ…」と。やがて二人は退場。あとに残された三人は静かにこう云って幕になる――

祭司 子供達をお許し下さいまし。神様。

科学者 無知は至上の幸福だ。

詩人 人生の意味？ 男がそれを女に与え、女がそれを男に与える。……  
併し誰がその本体を説きえよう。誰がそれを知りえよう。

以上がこの一幕詩劇のストーリーである。いかにも短かくて単純な構成の作品であり、登場人物が一定の観念の型に過ぎないのみならず、作品全体が作者の詩的イメージを一つの型にはめて造型したような感じの作品である。その事を認めた上でなお高垣氏はこの作品の与えてくれるものを評価して云う――

……詩人の同情と洞観とが各々の人物の言葉のはしばしに充ちひろがっている。型でありながら、その底に豊かな、普遍的な人間性の轟動が感じられる。作家の魂が祭司の心と共に波打ち、科学者の観念と共に律動し、詩人の神経の鋭どさにつれて顫動し、女の胸と同じく喘ぎ、男の憧憬をあこがれているからである。形式の上から見て堅い型にはまっていると思われる此の劇が我等の心に特殊な響きを与える所以は茲に存している。（「はしがき」より）

今日「夜」の欠点を指摘することは容易であらう。高垣氏の読みの甘さを云々することも簡単であらう。しかし、氏が留学のために後にした大正8年の日本では「過去の文化」が苦悶し、新しいものへの転換の波が激しく押し寄せていたこと、アメリカに渡ってみるとやはり事情は同じく、そこでも古いものが新しく力強い声の前で息絶えんとしていたこと、その新しく若く力強いアメリカの声の一つをオープンハイムが代表していたというこの点に高垣氏のオープンハイムへの共感があったという事だけは指摘しておかなければならない。氏に於るこの精神的状況はその後もしばらく続き、二年後には「<sup>(12)</sup>オープンハイムの詩」(『日本詩人』大正12年6月号)を書いて、自伝詩 The Mystic Warrior (1921) から主要部を訳しながらオープンハイムの半生を紹介している。この中でも氏はこの詩人と作品を次のように説明している――

げに此集はウォルト・ホイットマンに献げられたもので、献本辞に To Whitman. Your book walks in the light: let me be the shadow beside it. とある。Louis Untermeyer が其著 The New Era in American Poetry (1919) に説いている所に従えば、ホイットマンは直系の後継者を残さなかった。そして暫時の沈黙の後に彼の解

釈者や彼に私淑するものが続々として現われたけれども、彼のヴィジョンを発展させて当然行きつくべき境地にまで導いた者はなかった。然るにオープンハイムがはじめて此の任務に当った。彼はホイットマンを基礎としながら、彼れ自身の imposing and native structure (雄偉にして且つ本然の結構)を築き上げたのである。<sup>13)</sup>

高垣氏のオープンハイムに寄せる情熱が伝わってくるような文章である。氏はオープンハイムの自伝詩を紹介しながら人間としての詩人の「憧憬と苦悩と精進」に打たれる。この詩人の作品を読み進んで The Mystic Warrior にいたると「この詩人の姿はいよいよ筆者の心の生活にぐいぐい入って来た。くだけたる魂を父なる神の懷ろに導いてくれる詩人としてではなく、混沌たる魂の闇をかきたてて、そこに幾つかの思索の核心を形成させてくれる詩人として」<sup>14)</sup> 氏の心の生活の中に入ってきたというのである。あらためて「オープンハイムの自伝詩」を読み直してみた私には、当時、高垣氏が日本に於る自らの生活をオープンハイムの自伝詩と重ね合わせて読んでいたような気がしてならない。

☆(私に割り当てられた紙面はとっくに越してしまった。この続きはできるだけ早く別の機会を見つけて発表し完結させたいと考えている。)

### 註

- (1) 竹下嬉鏡子「高垣松雄」(昭和女子大学、『学苑』, 昭和28年5月号), p.23. および金子尚一「思い出の人々(1)高垣松雄さんのこと」(立教大学『セント・ポール』, 昭和41年5月25日号), p.3.
- (2) Cf. 大橋吉之輔「Sherwood Andersonと三人の日本人(8)」(『英語青年』, 研究社, 昭和51年2月号), p.13.
- (3) 高垣松雄「シカゴより」(『英語青年』, 大正10年9月15日号), p.375.
- (4) 上掲, 大橋論文参照。Brooks宛の手紙は現在調査中。Brooksより高垣宛の手紙は消失した模様である。
- (5) 杉田未来「北米文壇の新星」(『塔』, 立教大学, 大正12年1月号), pp.44-47.
- (6) 大正期の日本に於けるアメリカ文学については『日本の英学100年・大正編』(研究社, 1968年), pp.75-90. に西川正身氏の文章がある。
- (7) 高垣松雄「アメリカ文学の理解と受用」(『英米文学』12号, 立教大学,

昭和15年5月), pp.9-10.

- (8) 高垣松雄「ローウェル女史の詩風」(『アメリカ文学』, 研究社, 昭和2年), p.250. ローウェル作品の原題はAmy Lowell, Tendencies in Modern American Poetry (1917). 岡田哲蔵(明治2年-昭和33年)については詳しい事は分らないが, 東大哲学選科に学び, 陸軍大学教授, 青山学院講師をした。英文の詩集があり, 万葉集や漢詩の英訳も出版している。
- (9) この雑誌と内ヶ崎については次のような参考文献がある。久山康編『近代日本とキリスト教』明治篇, 大正・昭和篇(昭和31年, 創文社)。松井六郎「小崎弘道の東京伝道と『六合雑誌』」(同志社大学人文科学研究所他編『日本の近代化とキリスト教』新教出版社, 1973)。武田清子「『六合雑誌』」(岩波書店『思想』, 1962年12月号)。
- (10) 吉田精一「解説」(『現代文学論大系』第三巻, 河出書房, 昭和29年), p.363.
- (11) 『改造』改造社, 昭和4年6月号(河出書房『現代文学論大系・第五巻』ほかに収録)
- (12) 高垣松雄『現代アメリカ文学』(健文社, 昭和10年)に「オープンハイムの自伝詩」として収録。
- (13) 『現代アメリカ文学』, p.174.
- (14) 同上, p.212.